

機関番号：32610

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720183

研究課題名（和文）九州北西部及び中部方言における韻律単位の実態と変化のメカニズム

研究課題名（英文） Research on the unit that influences prosody in central and northwestern Kyushu dialect speakers

研究代表者

嵐 洋子（ARASHI YOKO）

杏林大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90407065

研究成果の概要（和文）：

九州北西部及び中部方言における韻律単位の実態と変化のメカニズムを明らかにするために、長崎県佐世保市を中心に、生成調査を行った。その結果、高齢層には、音調句末に特殊拍があると下降位置が変わりやすい傾向が見られたが、中年層にはその傾向は見られなかった。佐世保市方言においては、韻律単位が音節から拍へ変化している可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

This research examined the unit that influenced prosody mainly in the Sasebo dialect, in the northwest of Kyushu. Results of the acoustic analysis suggested that special morae such as long vowels at the end of a tonal phrase delayed the start of F0 fall for older speakers. However, this was not the case for younger speakers. Thus syllable unit was used for older speakers and mora for younger speakers. The results suggested the unit that influenced prosody varied depending on age in the Sasebo dialect.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000円	210,000円	910,000円
2011年度	300,000円	90,000円	390,000円
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000円	300,000円	1,300,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：音声・音韻・韻律単位・アクセント・モーラ・音節・佐世保市方言・熊本市方言

## 1. 研究開始当初の背景

多くの日本語方言では、拍を韻律単位としている一方、東北地方や九州南部地方などでは音節を韻律単位としていると言われている。しかし、熊本県や長崎県など、九州北西部及び中部地域の方言においては韻律単位が明確ではない場合も多い。また、共通語の影響等により韻律単位が変化していること

も考えられる。そこで本研究では、九州北西部及び中部方言における韻律単位の実態を明らかにするとともに、変化のメカニズムとしてアクセント体系に注目し、韻律単位の変化がどのような起きるのか、そのメカニズムを明らかにする。

## 2. 研究の目的

この研究の目的は、九州北西部及び中部方言における韻律単位の実態と変化のメカニズムを明らかにすることである。特にアクセント体系が複雑な熊本県、長崎県を中心に、韻律単位として音節と拍がどのように関わっているのかを明らかにする。また、世代別に調査を実施し韻律体系の変化を調べるとともに、アクセント体系の変化と韻律単位との関連を明らかにすることを目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) 被調査者

無型アクセントとされる熊本市方言は、先行研究において、十分とは言えないものの、韻律及びその単位に関して、言及が見られることから、管見の限り、研究データが乏しく、熊本市方言と同じ無型アクセントとされる佐世保市を中心に調査・分析を行った。本補助金の研究期間内に調査した佐世保市の被調査者は以下の通りである。生育地は全て佐世保市で、年齢は、調査開始時の年齢である。

話者	性別	生年	生育地	年齢
SF1	女	1942	京坪町	67歳
SM2	男	1943	俵町	68歳
SF3	女	1943	長坂町	68歳
SM8	男	1940	小島町	71歳
SF4	女	1944	名切町	66歳
SM6	男	1971	鹿子前町	39歳
SM7	男	1975	鹿子前町	36歳

### (2) 調査方法

まず、予備的調査として、話者 SF1, SM2, SF3 に対し、いわゆる伝統的なアクセント調査を行うとともに、自然談話を録音した。実施計画においては、単語単独による生成・知覚調査を予定していたが、予備調査より無型アクセント地域においては、単語単独の調査により韻律単位を調べることは難しいと判断し、それ以降の調査（話者 SM8, SF4, SM6, SM7）では、基本的なアクセント調査も行った上で、特殊拍を含む場合と含まない場合の文音調の違いから韻律単位を検討することとした。具体的には、まず、基本的な

音調を調べるための文の読み上げ調査を実施し、基本となる文音調を確認した。さらに、「一ばどこで見たと」「一どこで見たと」「一ね」という、それぞれの直前で下降することが予想されるキャリアセンテンスを用意し、下降の直前に自立拍が来るか、特殊拍が来るかで、下降の開始位置が変わるかどうかを調べた。また、同時に特殊拍を含む発音についても確認した

## 4. 研究成果

### (1) 佐世保市の基本音調及び音声的特徴

1 文節が 1 音調句である場合（「どこで見たと」の前の 1 文節「一ば」の音形など）、主に下記の音調概形で示したような①と②の 2 つの音形が見られた。①は、音調全体が右上がりの三角形状（拍数の少ない場合は、真ん中付近が高い三角形状もあり）である。一方、②は台形型で、平坦なものと、全体的に、やや右下がりのものがあった。

①



②



また、意味的限定関係がある文節連続では（「ナガサキノオミヤゲバ」など）、隣接の単位と一体化する傾向も見られ、その場合の音調は、全体が台形化するか、2 番目のヤマが抑制されて低くなった「高後低型」が多く見られた。

SM6, SM7 は高低変化が大きいのに対して、SF4 には、高低変化があまりなく、平坦な音調も見られた。

### (2) 下降の位置と音調変化を担う韻律単位

SM8 及び SF4 には、音調句末に特殊拍があると、下降位置が変わりやすい傾向が見られた。例えば、「一ばどこで見たと」「一どこで見たと」に関して、音調句末の助詞「バ」の直前が自立拍の場合、助詞の直前の拍の末尾から下降している。しかし、助詞の直前に特殊拍を含む場合、下降開始が少し早まる傾向が見られ、助詞の直前の拍の冒頭

から下降していることが多かった。特殊拍を含む場合でも、直前の拍の末尾で下降していると判断した例も見られたが、全て、長音が短く発音されているものだった(「ホーレンソバ」(ほうれん草)など)。助詞バのない場合に関して、音調句末の拍が自立拍の場合、音調句末の直前の拍の最後か途中から、下降していた。しかし、音調句末に特殊拍がある場合、下降開始が少し早まる傾向が見られた。

以上をまとめると、以下のような規則が考えられる。

○○○`バ | ドコデミタト 例ツクエ`バ  
○○○`■バ | ドコデミタト 例ラーメ`ンバ  
○○○`○ | ドコデミタト 例ツクエ  
○○`○■ | ドコデミタト 例ラー`メン

■ = 特殊拍, | = 音調句境界

一方、SM6, SM7 には、上記ほど特殊拍の有無による音調の変化は見られず、拍が音調変化を担う単位として使用されている傾向が示唆された。同じく、規則に示すと、以下のようになる。

○○○`バ | ドコデミタト 例ツクエ`バ  
○○○`■バ | ドコデミタト 例ラーメ`ンバ  
○○○`○ | ドコデミタト 例ツクエ  
○○○`■ | ドコデミタト 例ラーメ`ン

■ = 特殊拍, | = 音調句境界

### (3) 韻律単位の変化と要因

今回の調査だけでは、人数、調査とも十分ではないものの、九州北西部に位置する佐世保市方言において、高齢層では音節を、若年層では拍を韻律単位としている可能性が示され、韻律単位が音節から拍へ変化している可能性が示唆された。

しかし、単語アクセントに関しては、若年層でも依然として無型アクセントの傾向が見られた。高低差に関しては、若年層の方が、若干、大きくなっているものの、予想していたほどの高年層との著しい違いは見られず、アクセント体系の変化が韻律単位に及ぼす明確な影響は見られなかった。

今回、調査した中では最年長の話者である SM8 には長音を短呼する現象が多く見られたが、その他の話者には SM8 ほど見られなかつ

た。長音など、特殊拍の発音そのものの変化により、音調における韻律単位も変化をしている可能性もある。また、音調を担う単位としては、拍が示唆された中年層話者でも、単語を数えるときに、音節を意識していると思われる発言があった。今後、さらに様々な角度から、調査を進めていく必要がある。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 3 件)

#### ① 嵐洋子 (代表)・田川恭識

「佐世保市方言の音調とそれを担う韻律単位に関する一考察」近畿音声言語研究会 2012年1月7日 於 関西学院大学梅田キャンパス

#### ② 嵐洋子 (代表)・田川恭識

「熊本方言の談話音声に現れた音調句の分類一補足分析の結果について」近畿音声言語研究会 2011年7月2日 於 西宮市 大学交流センター

#### ③ 嵐洋子 (代表)

「熊本市方言の韻律的単位に関する準備的考察及び佐世保市方言の音調の調査に向けて」近畿音声言語研究会 2011年3月5日 於 関西学院大学梅田キャンパス

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕 なし  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

嵐 洋子 (ARASHI YOKO)  
杏林大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：90407065

### (2) 研究分担者

なし  
( )  
研究者番号：

### (3) 連携研究者 なし

### (4) 研究協力者

田川 恭識 (TAGAWA YUKINORI)  
早稲田大学・日本語教育研究センター・  
非常勤インストラクター  
研究者番号：なし